唯神様に祈つた。

八月十八日　眞の教と人間性

眞理を啓示する一切の教理は盲人には妄想である。吾々は多くの人民と共に言ふかも知れない。耶蘇の教理は人生に矛盾するが故に妄想的である。打たれた時に他の頰を向けると云ふこと、持てるものを凡て與へよと言ふこと、自分のためでなく人のために働けと言ふこと、これは凡て自然に反して居る。人間が彼の身体や家族や財産を保護するのは自然のことである。即ち生存闘争は人間の本性であると。學者は、人間の最も神聖なる義務は彼の權利を保護すること、即ち闘争であると證明した、と。

しかし人間の建てた現存の組織が最上のものであり神聖であると云ふ考へを捨てゝしまふや否や、耶蘇の教理が人間の本性に反すると云ふ異議は直ちにもつてその異議の申立者の上にかへり來るであらう。何人も、たゞに人を殺したり、苦しめたりすることのみならず、犬を虐めても家禽を殺しても、それが直ちに人間性の非難する苦惱

を蒙らす事であると云ふことを拒まないであらう。

八月十九日　秀才と彼自身

語學や數學に對する能力を持つて居て、理解や答辯には敏捷で、願ふ事も正しく、美しく、書く事も出來又そのように書く事も出來る者で然も道德的並びに藝術的な感情を持たず、從つて彼自身のものを何も持つてない者がある。

八月廿日　悔改

「イヴン・ドミトリッチ。」と彼は云つた。

「赦してくれ、神様の御慈愛のために、俺を赦して呉れ！俺はあの商人殺しは自分だと白狀しやう。さうすりやあんたは自由の身に成れて家に歸ることが出來る。」

「そんなことを言ふのはお前さんにとつて易い事だよ。」とアクシオノフは言つた。

「けれどわしはこの二十六年の間といふものはお前さんのために苦しめられてゐる今

わしは何處へ行くことが出來やう。――女房は死んだ、子供はわしを忘れてしまつてゐる。わしは行く處もないのだ。

マカールセミオニッチは起立りもせず床に頭を打ちつけ乍ら、

「イヴン・ドミトリッチ、赦して呉れ。」と叫んだ。

「俺が笞でなぐられた時は、今かうやつてあんたを見てる程苦しくはなかつた……それだと言ふのにあんたは俺を憐んで下さつたし、あの事も默つてゐて下さつた。キリストの爲めにこの惡者を赦して下され」そして彼はすゝり泣き始めた。

八月廿一日　自然の美と人界の醜

自分は七月五日にチエルトコフの家を立つた。

夕方であつた、美と幸福と祝福とは凡てのものゝ上に宿つてゐた。然るに人間の世界に於ては？、そこには貪慾、惡意、嫉妬、殘忍、肉慾及ひ放蕩がある。

人間の社會が自然界に於けると同じやうになるのは何時の時であらう？、自然界に

も爭鬪がある。しかしそれは正直で、單純で、又美しい。だが人間社會ではそれは醜劣だ。

自分も亦人間である故に、それを知つて居る。そして嫌惡する。

八月廿二日　自然のまゝに

麻屑をかぶつて樵の後へ倚つ掛つて以來、ニキタはそれつきり身動き一つしなかつた。自然を相手に生活し、まづ不如意に慣れた者の常として彼れは辛抱心が強く、數時間は愚か何日と云ふ間さへも、苟且の不安も苟且の苛立しさも味ふ事なく過ごす事が出來た。彼れは主人が自分を呼んだのも聞いたのであるが、身動きするのが億劫で默つてゐた、今夜自分は死ぬかも知れない、多分此の有樣では死ぬだらうといふ考へは、樵の後ろへ倚り掛つた刹那に考へついてゐた。それはの時振舞はれた茶のぬくもりや、幾度となく改道を攀ぢ上つて身體を動かしたぬくもりは未だ殘つてはゐるものゝ、之が何時まで續くものでない事や、身體をいま一度動かしてやりたいにも自分

には餘力がないことがわかつて居た。何故なら彼は疲れきつて居り、まるであの立往生した時、此上秣でもやらなければ動かし樣もない馬と自分とは同じだと云ふ氣がした。その上ボロ靴を穿いてる足は凍えかけて、その親指は夙つくの先きから觸つても感じがなかつた。そして身體が一體に寒くなつて來た。

八月廿三日　別の主人

今夜死ぬと云ふ考へは彼には別に不愉快でもなければ、恐くもなかつた。彼の生涯は一度だつて御祭の樣な事がなかつた。却つて間斷のない辛苦で、そして今になつてそれがそろ〳〵倦んで來た、そこで自分は愈々死ぬんだと思つたとて彼れには別に恐くはない。彼れにはワシイイ、アンドレイッチと云ふ樣な主人があつて、此の世に居ては之れに使はれて居た。併し未だ此の外に今一つ自分を此の世へ送つてくれた本家本元の主人がも一つあつて、自分はこれに依りすがつてる樣な氣がした。で死ねば死んだで此の主人の力にそのまゝ從つてしまふだらうし、それにこの主人は彼れを親切

にしてくれるだらうと思つてゐる、そこで自分は愈々死ぬんだと思つたつて彼には別に恐くはない。

八月廿四日　御心をなさせ給へ

彼は橇の底へ小さくなつた。併しちつとも溫くならなかつた。斯んな事をしてる內に五分間もたつと身體全體が慄へて來た。その內慄へが止んで段々氣が遠くなつた。死ぬのか、眠るのか――それはわからない。併しどつちにしても覺悟が出來てる氣がした。今まで通り下男奉公をする爲に、他人の馬を世話する爲めに、他人の裸麥を水車場へもつて行く爲めに、時々飲んだくれては禁酒の誓を立てる爲めに、女房は兎に角としてあの桶屋にまで金を貢ぐ爲めに、若しくは、その何時まで經つても子供である彼の子息が大人になるまで待つ爲めに、神が命を存らへて此の世に目を覺醒せと命ずるならば――それはみ心のまゝになさせ給へである。あの世では何も彼も新らしくて樂しい事、丁度子供の頃でも未だ一番最初の頃母の慈愛や、幼な友達との遊びや野

良や森や、雪滑りが此の世では新しくて、樂しかつたのと同じであらう。若し神が命じてあの世に目を醒ませと云ひ、自分の爲めに別の生活、それも今の生活とは似ても似つかない、まるきり新しい別の生活を始めろと云ふならば――其れも御心のまゝになさせ給へである。

でニキタはすつかり氣が遠くなつてしまつた。

八月廿五日　知識と生命

カントは人類の思想に一　の革命を起したと云はれて居る、彼は、物自爾は知識には知り難いと云ふこと、知識及び生命の源は精神的のものであると云ふことを示した最初の人であつた。だが、唯人々に分るやうな方法ではあるが二千年以前に基督の云つたこともそれと同じではないか。

神靈と眞理を拜せよ。神靈は創造する生命である。文字や肉體は何の益するところもないと。

八月廿六日　火は火を消し得ぬ如く惡は惡を鎭壓し得ぬ

これ等の言葉は非常に單純である。しかしそれは決して神及び人間の法則の表現でない。もし歴史上、惡の鎭壓に向つての進歩的運動があつたとするならば、それは耶蘇の教理――惡を忍び、暴力によつて惡に抵抗しないところの――を了解した人々によるのである。正義に向ふ人道の進歩は暴君によつてではない。殉教者によつてである。火は火を消すことを得ない如く、惡は惡を鎭壓する事を得ない。惡に面前し、その感染に抵抗する善のみが惡を征服する事が出來る。

八月廿七日　感謝

八月廿九日　死は終つた

之れは三日目の終り、彼れの臨終の三時間前であつた。丁度際どい瞬間に例の學校の子供がこつそりと父親の室へ忍び込んで來た。そして父の寢床へずつと寄つて行つた。瀕死の人は今聲を限りに叫んで、手を振り廻してゐた。その手が子供の頭へ落ちた、子供は其の手を引つたくつて肩へ押しつけてわつと泣いた。

丁度其途端にイワン、イリッチは例の穴の中へ轉がり込み、例の光りに目がついてそして自分の生活は當然さうあるべき筈のものでなかつたと云ふ事が示されたのであつた。彼れは「正しい事とは何だ」と自分に反問した。そして靜かになり、じつと耳を澄ました。すると誰れか自分の手をキッスして居る樣な氣がした。彼は眼を開いて自分の息子を見た、彼は息子を不憫に思つた。妻が傍へやつて來た。彼れは其れに目をぢつと移した。彼女は口をポカンと開いて、涙は自在に鼻や頰を流れて居り、顏には絶望の面色を浮べて、ぢつと目を凝らして彼を見た。彼は妻を不憫に思つた。

あらうか。

八月廿八日　誤れる先入見による解釋

慥に私は耶蘇の教について誤解を起こすやうな誤れる觀念をもつて居たに相違ない。そしてその誤れる觀念を私は慥にもつて居た。私が初めて福音書を讀みかけた時は、耶蘇の教理について一少しもきいたことのない者が初めてそれと近づきになつたやうな狀況に於てではなかつた。それとは反對に、それを了解すべき方法に關する先入的な學說を抱いて居た。耶蘇は神の律法を啓示する豫言者として私に現はれなかつた。たゞ、私が既に知つて居た絶對的な神の律法を繼續し敷衍するものとしてゞあつた。何となれば私は、神、卽ち人及び世界の創造者について、また、モーゼと云ふ仲保を通して人々に與へられた神の誡めについて、極めて決定的なそして複雜な概念をもつて居たのであらう。

「さうだおれはこいつ等をみじめにして居る。」と彼は思つた。「こいつ等が可愛想だ。でもおれが死んだら「皆なの爲めにもいゝだらう」そこで彼れは之を云はうと思つたが、云ひ出す氣力がなかつた。「それに云ふ必要なんてあるか。おれは實行しなくちやいけない」とひとりで思つた。彼れは妻にチラリと目をやつて息子を指して斯う云つた。

「あつちへやれ……可愛さうだ……そしてお前も亦……」彼は妻に何とかして「ゆるしてくれ」と云はうとした。ところが「すてゝくれ」……と云つた。併し衰弱してゐるので云ひなほす力もなくて手を振つた。「主」は其の眞意ある處を理解してくれるだらうと思つたからだ。

忽然として彼をこれまで苛責した一切のもの、彼れの所を立ち去らうともしなかつた一切のものが一遍に兩方へ、八方へそしてありとあらゆる方向へ消散しつゝある事がハッキリと見えて來た。彼れは皆のものを可哀さうに思つた。そこで彼等が苦しまない樣に實行しないといけないのである。

彼れ等を解放し又吾が身も其の苦悶から拔かしてしまふのである。「なんて正しくなんて雜作がないんだらう！」と彼は思つた「だがあの苦痛は？」と自分に聞いた

「あいつは何處へ行つた。えゝお前は何處に居る、苦痛は？」

彼れは其れを探し始めた。

「あゝ、ゐる、ゐる。だが何んでもないんだな。これは此のまゝ拋つて置け」

「で今度は死だ。こいつは何處に居る？」

彼れは死と云ふ昔馴染の恐怖を探した。そして見つからなかつた。「あいつは何處に居る？、死は如何した！」恐怖は影も形もなかつた。何故なら死と云ふものが矢張なかつたからであつた。

死のゐる坐には光が居た。

「ではこいつがさうなんだ」と彼れは思はず大きな聲を出して叫んだ。

「嬉しい！」

彼れには皆、これはほんの瞬間内に起つた。そして其の後々は斯うした意味の瞬間

に何の變化も被らなかつた。唯だ現在だけは苦悶は此の上二時間續いた。咽喉には喉鳴り痩せ衰へた身體には痙攣が現はれた。それから喉鳴りと大息が段々永く間を置いて來た。

「もう駄目だ」と誰かゝ云つた。

彼れはこの言葉を聞きつけて魂の中で其言葉を繰り返した。

「死は終つた」と獨り彼れは云つた。「もうそんなものは何もない。」

彼は息を吸ひ入れてその中途で息が止つて身體をぐつと伸し、そして死んだ。

八月卅日　死刑

三十年以前、私は巴里で、ある人の頭が幾千の見物の前で、ギロッティンの下に斬落さるゝのを見た。私はその男が大罪を犯して居るのを知つて居た。私はかゝる罪惡に對する死刑の正當を主張する議論をよく知つて居た。私はこの死刑の執行が愼重に行はれるのを見た。併しながら、その頭と胴とが鋭い刄によつて互に分たれた時、私

は私の生存の全神經に於て、私が今迄死刑に就いてきかされた凡ての議論が全く善くない虚言であるのを知つた。たとひ如何に多くの人がその合法であることに同意しても、それは文字どほりに殺人である。人はそれにどんな他の名義を附するとも、彼等はかくして、殺人を、罪惡のうちの最惡の罪惡を、實際に行つたのである。そして其處で私は、私の沈默と無干渉との故に、その罪惡の補助者であり奬勵者あり協力者であつたのである。

八月卅一日　乞食を捕へるのは

人々が何處の街でゞも多數の乞食に會ふのにも拘はらず、法律に從へばモスクワでは乞食は禁ぜられて居る樣に見える。併し何故ある者が捕へられ拘留されて、ある者がされないのか。これが私には解らなかつた。合法の乞食と違法の乞食がある爲なのか。または彼等を凡て捕へることは不可能の爲なのか、或はまた或者が捕へられても直ぐ他の者がそれに代る樣になる爲なのか。

九月一日　蛇の頭と尾

蛇の尾と頭とが、どつちが先きに行くべきかと云ふことで口論をして居ました。

頭が曰ひました。

「君は先きに行けないよ。第一君は目もなけりや耳もないぢやないか」

尾は答へました。

「しかし何は兎も角、君を行かせるのは僕の力だからな。もし僕がしたいと思ふなら木に捲きつくことが出來る。すると君はそれをどうにもすることは出來やしないんだ。」

頭が曰ひました。

「ぢや別れようぢやないか、お仲間。」

そこで尾は頭からちぎれて自分の方向へ這つて行きました。

しかしそれが頭から離れるや否や。ある割れ目のところに來まして、その中におつこちました。

九月二日　遺産の分配

或る父が二人の息子をもつて居ました。彼は彼等に曰ひました。

「俺は死にかゝつて居る。何でも等分に分けろ。」

お父さんが死にました時、二人は喧嘩をせずに分け前をとることが出來ませんでした。

そこで二人はさばきをつけて呉れる樣にと隣人にたのみました。

隣人はお父さんが彼等に何といひつけたかをきゝました。

彼等は答へました。

「何でも等分にわけろとお父さんはいひつけました」

すると隣人は曰ひました。

「凡ての衣物を二つにお裂きなさい。凡ての道具を二つに割りなさい。凡ての家畜を

二つに切りなさい。」

兄弟は隣人の忠告をきゝ入れました。そして結局何ものをも得ませんでした。

九月三日　猿

或人が森に行きました。彼は木を伐つて、それを細かく切りはじめました。彼は木の端を切株の上にのせて、その上にまたがり、そして挽きはじめました。それから彼はその裂目に楔を打ちこんで、もつと〳〵挽きはじめました。それからまたその楔をとつて新しい裂目に打ちこみました。

一匹の猿が木の上に坐つてそれを見て居ました。

その男が寢ころんで眠りました時、猿は木の上に跨つて挽きはじめました。ところが彼が楔をとり出した時に、木の裂目がしまつて、彼の尾をはさみました。

猿はもがいてキャッ〳〵と叫び初めました。

すると男が目をさまして、猿を打ちたふし、綱で縛りました。

九月四日　猿と豌豆

一匹の猿が二握みの豌豆をもつて行つて居ました。一つの小さな豌豆がころげおちました。猿はそれを拾ひあげやうとしました。そして二十粒こぼしました。彼はその二十粒を拾はうとしました、そしてみんなをこぼしました。そこで彼は癇癪をおこして、豌豆をそこいらぢゆうに撒きちらして、何處かへ駈け出して行きました。

九月五日　立派な糸

或人が紡績工に立派な糸を紡ぐ樣に命じました。紡績工は立派な糸を紡ぎました。しかしその人は糸がよくないと云ひました、そして彼はとびきり上等の糸が欲しいのだと云ひました。

紡績工は曰ひました。

「もしこれで十分お氣に召しませんでしたら、それぢやこゝにお恰好なのが御座い

す。」

そして彼女は何でもないところを指示しました。男はそれが見えないと曰ひました。

紡績工は答へました。

「あなたがそれを見得ないと云ふことは即ち此の糸の飛び切り上等なことを證明するものです。私自身も實は見ることが出來ませんのです。」

馬鹿者は喜びました。そして同じ糸をもつと澤山注文しました。そしてそれのためにお金を拂ひました。

九月六日　乳牛

或人が一疋の乳牛をもつて居ました。乳牛は毎日一桶の乳をその主人に與へました。

その人は五六人の客を招きました。澤山の乳をしぼらうと思つて、彼は十日の間も

乳牛の乳をしぼりませんでした。

十日目には十桶の乳がしぼれるだらうと彼は思ひました。

しかし乳牛の乳は乾いて居ました。そして以前よりは少しゝかしぼれませんでした。

九月七日　家鴨と月

一羽の家鴨が河に浮んで魚をあさつて居ましたが、一日かゝつて一疋も見出しませんでした。

夜になつて月が水に映つた時、家鴨はそれを魚だと思ひました。そして月を捕へに水の中にもぐり込みました。

他の家鴨がこれを見まして、からかひ初めました。

その時から此の方、家鴨は大變にそれを恥ぢて勇氣を失つてしまひました。で、水の中にほんとの魚を見つけましても決してそれを捕へようとはしませんでした。それ

がために家鴨は飢えて死にました。

九月八日　穀倉の下の鼷鼠

一疋の鼷鼠が穀倉の下に住んで居ました。穀倉の床に小さな穴があつて、穀物がその穴からすべり落ちて來ました。鼷鼠の生活は幸福でした。ところが此の鼠は自分の生活を見せびらかし度いと願ひはじめました。

鼷鼠は穴をもつと大きく嚙りました。そして他の鼷鼠どもを招待しました。

「いらつしやいな。」彼女は曰ひました。「そしてお祝ひでもしませう、食物ならどつさりありますからね。」

しかし彼女は、他の鼷鼠たちをつれて來ました時穴がないのを發見しました。百姓がその床の大きな穴を見つけて、ふさいでしまつたのでした。

九月九日　蒼鷺と魚と蟹

一羽の蒼鷺が池のほとりに棲んで居ました。だんだんと年をとり初めました。彼女はもはや魚を捕るだけの力がありませんでした。そこで彼は、何うして生きて行く工夫をしたものかともくろみはじめました。そして彼女は魚たちに曰ひました。

「魚さんたち、お前さんたちはどんな不幸がお前さんたちをおどかして居るかと云ふことを少しも御存じぢやないのね。私はある人々が此の池を乾してお前さんたちをみんな捕らうぢやないかと云つて居るのをきゝましたよ。しかし、此の山の向う側には小さな綺麗な池がある。私はお前さんたちをそこにつれて行つてあげ度いが、しかし今はもう年をとつたので、飛ぶのか大儀でな。」

魚たちは蒼鷺に自分たちを扶けてくれと願ひました。

蒼鷺は答へました。

「私は私に出來るだけのことはして見るつもりです。私はお前さんたちをつれて行き

ませう。けれど一度には駄目だから一度に一つづゝと云ふ事にしませう。」

そこで魚たちは喜びました。彼等はみんな曰ひました。

「私をつれて行つて下さい。私をつれて行つて下さい。」

蒼鷺は彼等を運び初めました。彼女は一度に一つづゝとつて野原に運んで行き、そして喜んでたべました。こんな風にして彼女は澤山の魚をたべました。

ところが此の池の中に一疋の舊い蟹が棲んで居ました。蒼鷺が魚たちを持ち去るのを見て、一體これは何と云ふことかと疑ひはじめました。そして彼は曰ひました。

「では、まづ、蒼鷺さん、俺もお前さんの新しい棲處へ　れて行つてお呉れよ。」

蒼鷺は蟹をつかんでとび去りました。野原に達するや否や、蒼鷺は蟹をおとさうとしました。しかし蟹は魚の骨が野原にあるのを見ましたので、爪を蒼鷺の首のぐるりにしがみつけて絞めころしました。そして彼は池に這ひ戻つて來て、魚達に此のはなしをしました。

九月十日　水の精と眞珠

或人が船に帆かけて走つて居ましたが、貴重な眞珠を海の中におとしました。その人は陸に返つて、桶をとつて水を汲んで濱に注ぎかけました。

三日の間と云ふものは、彼は根氣よく汲んではあけました。

四日目に一人の水の精が水中から出て來まして問ひました。

「なぜお前さんは水を汲むのですか。」

男は答へました。

「私は眞珠をおとしたので汲んで居るのです。」

水の精は問ひました。

「はやく止めたいでせう。」

男は答へました。

「此の海を汲み乾した時、その時こそやめるでせう。」

すると水の精は深淵に歸へて行つて、その眞珠を持つて來てそれをその男に與へました。

九月十一日　盲人と牛乳

一人の生れながらの盲人が目の見える人に問ひました。

「牛乳はどんな色をして居ますか」

見ることの出來る人は答へました。

「牛乳の色は白い紙の樣なものです」

盲人はきゝました。

「此の色かね、では、手の中で紙の樣にバサ〳〵云ふ。」

見ることの出來る人は答へました。

「いや。それは白いんだ。白い粉の樣に。」

盲人はきゝました。

「では、それは粉の様に柔らかでサラ〳〵して居る、さうですね。」

見ることの出來る人は曰ひました。

「いや、それはたゞ白いんだ。家兎の様に。」

盲人はきゝました。

「ではそれは家兎の様にムク毛があつて柔らかなのですね。」

見ることの出來る人は曰ひました。

「いや、白と云ふのは全く雪の様な色です。」

盲人はきゝました。

「では、それは雪の様に冷たいんですね。」

こんなにして、見ることの出來る人がどんな比較をして見ても、此の盲人には牛乳の色が一體どんなものかゞ全くわかりませんでした。

九月十二日　狼と獵人

一疋の狼が一疋の羊を食べて居ました。獵人はそれを見つけて打ちはじめました。

狼は曰ひました。

「あなたが私を打つのは正しくありません。私が野獸であるのは私の過ちぢやありません。神さまがそんなにお造りになつたのです」

しかし獵人は答へました。

「吾々は狼が野獸だから打つのぢやない。羊を食ふから打つんだ。」と。

九月十三日　勞働逃避の權利

もしも吾々にして萬人に固有にして自然である勞働を逃れて、それを他人の肩に負はしめ。而も同時に自らを謀反人とも盜賊とも惟はない樣にしたならば、吾々は唯それを二つの假定——其第一は、一般の勞働者の仲間に入つて居ない吾々は、勞働者と

は別種の人間であつて、社會に於て成就すべき特殊な運命をもつて居る（働蜂とは其器能を異にして居る雄蜂や王蜂の如く）のだと云ふこと、第二には生存競爭から自らを自由にした人々であるところの吾々が他人の爲めになして居ることは、吾々が他人に過重の重荷を負はして居るのと、彼の害惡に比して、疑ひもなく相償ふ程にも萬人にとつて有用なことを、他人の爲に爲て居るのだと云ふこと——によつてのみなし得る。

九月十四日　富者と貧者

「吾々は暖かい室に安坐して居る、が、今日は往還では寒氣の爲に行き倒れた人があつた」

「それは誰も宿を貸して呉れる人が無かつた爲めに凍死したのだ。」

「吾々はカツレツや色々の肉饅頭を腹一杯食べて居るが、サマラ縣では數千の人民が饑饉で飢死せんとして居る。」

「吾々は馬上で水浴に行く、が、プロコフイーの家では他に代りのない一頭の馬が斃死したので畑を耕すことが出來ないで居る。」

「吾々は未だ熟睡して居るが、仕立屋は既にツーラ市に驅けつけて私共のシャツの釦を買つて歸途についた」

九月十五日　此所と彼所

左樣、此所には健かな七八人の若い男女が居る。お前達は十時にならなきや起きて來ない。そして起きて來て何をするかと云へば、直き食つたり飲んだりする。今時分まで食ひ乍ら、ピアノを彈いたり、音樂を論じ合つて居る。あそこでは――丁度今俺は其處から歸つて來た。――皆、朝の三時には起きる、中には家畜の番をして夜通し眠らないで、徹夜をするものさへある。そして年寄りも、子供も、胸に赤ん坊を抱いた女も、もう直きに兒の生れそうな大きな腹を抱へた女でさへも、皆その勞力の結果を吾々に獻げんが爲に、あらん限りの力を出して働いて居る。而もまだそれでも飽き

たらないと云つた風に、彼等のうちの一人は、一家のたつた一人の働き手でありながらこの春、俺の所有だと云はれて居る森から一本の松の樹を伐つたと云ふので――其處に生えて居る十萬分の一だ――丁度今牢屋の中にぶち込まれてしまつたのだ。こゝでは、吾々は、洗ひきよめられた綺麗な着物を着て居る、そして汚れたものは一切、寢室のうちへ脫ぎ捨てゝおいて、奴隷共に運ばせて居る。そして飲んだり、食つたりしながら、シュウマンとショオパンとは孰方が觸れるとか、どちらがより善く俺忘を散じ得るか等と云つて議論をして居る。これが丁度今俺がお前さん達を見ながら考へたことなのだ。だから話して置く。それでまあ考へて見るがいゝ。こんな風なことをして生きて行けるかどうかと云ふことを。（大いに昂奮せる狀態にて立つて居る）

九月十六日　葉　兒

あるまづしい女に、マーシャといふ一人の娘があつた。マーシャがある朝のこと水汲みに行く途中、戸口の階段の上に何かボロに包まれたものが置かれてあるのを見

た。彼女は桶を下へ置いてボロをあけて見た。ところがそのボロをあけて見ると、その中にオギヤ〳〵と叫ぶ聲をきいた。

マーシャは屈んでそれを見ると可愛らしい小さい赤ん坊であつた。赤ん坊は力をこめてオギヤ〳〵と泣きつゞけて居た。マーシャはそれを腕にとり上げて家へつれて來た。そして匙で少しの乳を與へて見た。

母さんは言つた。

「お前は何をもつて來ましたの。」

「赤坊です。私はそれを戸の所で見つけたんです。」とマーシャは答へた。

「私共は貧乏人です。どうして他の子供に食物を與へることが出來ますか。私はこれから警察へ行つてそれを連れて行つて貰ふよ。」と母は言つた。

マーシャは泣き悲しんだ。そして言つた。

「お母さん。赤坊は澤山食べはしません。どうぞ置いてやつて下さい。御覽なさい。何ときあ、可愛らしい靨のある手や指を持つてゐるでせう。」

母はよく見た。そして赤坊を可哀相に思つた。彼女はそれを内に置いてやらうと決心した。マーシャは、赤ん坊を養つてやり、又、おむつまで包んでやつた。そして子守唄を歌つて眠りに誘つてやつた。

九月十七日　精進

さうだもしお前が他人の爲に死ぬことが出來るなら、お前自身の爲にも亦他人の爲にも本當にいゝことだ。併し只一つ殘つて居る事實は、人は單に靈であるばかりでなく、肉に住む靈であると云ふことだ。そして一方、光耀せられた心靈が神のため又他人の爲めに生活すべきことを促すと共に、一方その肉は自己の爲に生活すべきことを迫るんだ。そしてこの矛盾撞着の結果は吾々をして中庸の道を撰んで進ましめるんだ。一歩神に近づけば、一歩善くなつたのだ。だから神の爲に生活することを努めれば努める程、吾々はより善くなるんだ。肉は放棄つておいても自分の爲に充分の努力をする。

九月十八日　願望と存在

もし、吾々の信頼するに足るべき、そんな不壞の權威が存在して居るなら、それは確かにいゝことだ。實際また存在して居てほしいものだ。併し願望が直ちに存在の證據とはならない。

九月十九日　何を信ずるか

信ずる?、吾々は信仰なしには生きられない。吾々は信じなきやならない。併しそれは他人の云ふ事をぢやない。たゞ吾々は自分の思想や理性の示すところを信ずるまでだ。……卽ち神を信じ永遠不朽の眞生命を信じるのだ。

九月廿日　刑罰

假りにその森が私のものだと思はれて居るにしたところで――そんなことは有り得

ないことだ。―私の所有して居る森は二千三百五十エーカーありますから、今一エーカーに二百本位の樹があると見ると、總數で四十五萬本と云ふ大數になります。ところがまあ考へて見て下さい。彼等の伐つたと云ふのは、たつた十本ですよ。さうすりや、それは全體の四萬五千分の一ぢやありませんか。これしきのことが、人をその家庭から奪ひ、牢屋に投げ入れてしまう丈の價値のあることでせうかそんな事が出來るものでせうか。

九月廿一日　刑か救か

よろしい。それは何うでもよい。俺にとつて大切なことは、若し俺がエフアイムの地位に居つたら、俺だつて、丁度あの男の行つた通りのことをしたゞろうと云ふことだ。そしてそうした後、牢屋に入れられて絶望してしまうまでだと云ふことだ。そこで己の欲するところは、これを他人にも施さうと思ふから、俺は何うしても彼の男を起訴へる事が出來ないのだ。そして彼を救ひ出す爲に全力を盡さなきやならんと思ふ

のだ。

九月廿二日　覺めた時

惡に與してはならないんだ。土地を所有してはならないんだ。彼等の勞力によつて養はれてはならないんだ。それは……少くとも俺にあつては、然うだつたんだ。俺は成程生きて居ることは生きて居た。併し自分がどんな生活をして居にかを知らなかつたのだ。凡ての人が神の子であつて、皆が兄弟であると云ふことを知らなんだのだ。併し俺は其ことが解つたとき。また萬人が人生に於いて同一の權利をもつて居るといふことを知つたとき、その時、俺の全人生が全く變つてしまつたのだ。俺は克くその事を君に云つて聞かす事が出來ないが、只俺は、これ丈の事を云ふことが出來る。と云ふのは、丁度今、俺の家のものが盲目である樣に、俺も以前は盲目であつたが、目が開かれた現今では俺は見ないでは居られないと云ふことなんだ。そして、それを見るかぎりは、俺はもう以前の樣な生活を續けて行くと云ふことが出來ないと云ふこと

なんだ。勿論、現在に於ては、吾々は各自に自己の最善を盡さなきあならんのは言ふまでもないが。

九月廿三日　土地私有

些つとも。私は只だ、人民から掠奪し、彼等の土地を私有することの罪惡を認めたときに、基督の律法に從つて、何うしたらよいものでせうか。私の土地を持ち續けて行つて飢餓にせまつて居る百姓の勞力を私用してもいゝものでせうか、丁度こんな風に。（畫食と葡萄酒とを持つて來た僕婢を指示して）もしくは、私の先祖が奪つた土地を之等の人々に返してやるべきでせうか。

九月廿四日　虐殺の上に築かれたる職業

彼の男が俺に相談しなかつたのはよく出來た。彼れは俺だつて彼の知つて居る以上の事は解らないと云ふことを知つて居るんだ。何時かも俺に言つて居た。虐殺と云ふ

土臺の上に築かれたものより、もつと非律法的な、もつと慘酷な、もつと禽獸的な職業はない。またそして自分の上官になつたものの誰彼の區別もなく、ひたすらに盲從することより以上にもつと恥辱なものは何にもないと云ふことがわかつたから、を願ひ出したのだと云つて居た。彼はようくわかつて居るのだ。

九月廿五日　生みの苦しみ

それは丁度、母たるものが「何故苦しむ」のかを尋ねるのと同じことだ。けれども子供は生みの苦しみなしには生れることは出來ないのだ。そしてまた、靈魂の生れるのもさうなんだ。俺はたゞ一つの事を云ふことが出來る……ボリスは眞の基督信者だ。だから自由なんだ。だから、もしお前はあの男の樣になる事が出來ればあの男の信ずる樣に、神を信ずる事が出來なければ、寧ろお前はあの男を通して神を信ずるがいゝ。

九月廿六日　試練

あゝ、神よ、願はくは人生は爾に仕へんが爲めに存するものなることを覺らしめ給へ。爾が私に試練を與へ給ふのは、私がよくそれに耐へ得るものと思惟せられたからだと云ふことを覺えしめ給へ。試練は決して私の力以上ではありません、さうでなければ試練とは云はれないからです。父よ、扶け給へ、……自の意志を行はずして爾の意志を行ひ得る樣扶け給へ。

九月廿七日　掠奪の上に築かれたる生活

先づ第一に此處の生活は腐敗れて居る……と云へばお前は怒るかもしれんが、併し私は、掠奪の上に築き上げられた生活には、これより外に適當な言葉を見出す事が出來ないのだ。……お前の生活して居る金は、人民から盜んだ土地から出て來るのだ。のみならず私は、それが爲に、子供がどんなに腐敗しつゝあるかと云ふことを

毎日見て居る。「これ等のいと小さきものを躓かすものは禍なる哉だ。而も私は現在目の前に、自分の子の頽廢して行く有様を見て居なけりやならんのだ。また私は、燕尾服を着た大人が、恰も奴隷の様に、私達に仕へて居るのを見るに堪へないのだ。何も彼も實に悲惨の極だ。

九月廿八日　知識階級の勞働遁逃

併し。自らの手をもつて働かずして、而も萬人の平等を認むる近代の教育ある人々は何故彼等及び彼等の子孫達のみが、彼等の教育の爲めに幾百となく幾千となく滅ぼされて居る、それ等幾百萬の者の中からかゝる容易で怠惰な生活に召命されたかを說明することが出來ない。彼等の唯一の辯明はこのうちに構成する。即ち丁度彼等が自らを勞働から解放し、他人の勞力を呑み盡すことによつて勞働者に害をなす代りに、人民に彼等の知らない何等かの利益を持ち來し、そしてそれは彼等の行ふ凡ゆる害惡を償うに足る、と云ふのである。

九月廿九日　無害有用なる活動及制度

然りそれは認められる。多くの人は經國の才が彼に必要だと思惟する。大多數は、原理として、その活動の有力を認める。併し吾々に知られたる凡ゆる特殊なる條件に於いて、各々の制度及び、各々の活動の現はれが有用であると云ふことは、たゞその人々によつて拒まれるばかりでなく、有毒であり有害であるとさへ言はれる。多くの人々によつて有害だと思惟せられない政治的機能も社會的活動も有毒だと思惟せられない制度もない。

九月卅日　政治家の心事

第二の試金石にあてはめて見よう。先づ吾々は上はザアや教長や大統領やから、下は巡査や寺男や書記に至るまで、所謂政治家と稱するところのものに向つて、誠實な答へをなさんことを乞うておいて、さて彼等がその尊敬すべき地位を占めて居るのは

人々に向つて何か善をなさうとして居るのか、或は何か他の事をなさうとして居るのかを訊いて見よう。また皇帝や大統領や大臣や警部や寺男や教師やの地位を占めやうと欲するのは、彼等が人々に有用ならむとする願望によつて動いて居る爲なのか、或はまた、自己の個人的利益の願望によつてゞあるかを。然らば、眞摯なる人々は、彼等の主たる動機は彼等自身の個人的利益のためであると云ふであらう。

十月一日　政治的活動

然らば政治的活動が人類にとつて有用であるとする理論を確かむるものは何であるか。それはたゞ、これを行ふ人が、それを有用だと信ずることを斷乎として宣言するのと、それが常に存在して居たと云ふ事實とによるのである。併し、同じ樣にまた、奴隷や娼婦や戰爭の如く、たゞに無用であるばかりでなく、非常に有害な制度も常に存在して居たのである。

十月二日　愛

何人も又何事も、彼の欲する事柄をなす事から彼を妨げない時にのみ彼は自由である。左樣な事柄は唯一つしかない――愛する事だ。

十月三日　研究と原理

人々は事實を研究する前に、それによつて事實の研究せらるべき何等かの理論をもたねばならぬ。即ちそれを決定するのに、無數の事實の中から撰擇しなければならぬ。そしてこの理論は實際存在して居るのみならず、非常に正確に表白されてさへ居る。たゞ近代科學の徒がそれを無視して居るに過ぎない。即ち、それを知ることを欲しないのである。もしくは實際にそれを知らないのである。――時としては知らない樣な風をするのである。

十月四日　科學と道德

カントの著書の二部門に關して起つたのと同じことが茲にも亦繰返された。「純粹理性批判」は科學によつて承認された。併し道德的教理の本質を含んで居る部分の「實踐理性批判」は拒否せられた。カントの教理のうちで科學的であると認められた

部分は全世界を掩へる害惡に媚たところのものである。

十月五日　進化論

進化論は、卒直に云へば、たゞ、無限の時間を經過する間に（偶然に）君の好むところの何者でも、君の撰ぶ何か他の者から生出すると云ふことを斷定するものである。

これは問題に對する答でない。同じ質問を他の形に置き代へたまでゞある。意志の代りに機會が置かれたのである。そして無限の協力が全能から時間に移されたまでゞある。

十月六日　分業

人々は要求されないことをして、その爲に養はれんことを請ふ。そして、それが分

業だから正しいのだと云ふ。人民の主なる社會的禍害は――單に吾々（露國）に關し（このみ云ふのでない――無數なる政治官吏の遊民に在る。現時に於ける經濟的不幸の主因は、英國の所謂「生產過多」である。（卽ちそれは、何人も要しない、そして何うしてそれから脫れていゝか解らない程の莫大なる物品の生產）凡てこれは「分業」と云ふ奇妙な思想から出て來たのである。

十月七日　奉仕のための科學と藝術

吾々は盲目となる、吾々の勞働が何の爲になされて居るかをさへ忘れてしまつた程にも、吾々の負へる義務を忘れしめた。そしてその、仕へんと欲した人民を、吾々の科學的及び藝術的活動の對照となした。吾々は吾々の快樂や娛樂の爲めに彼等を研究し、そして描寫する。併し吾々は、吾々の義務は彼等を研究することでもなく、描寫することでもなく、彼等に仕へんことであると云ふことを、全く忘れてしまつて居る。

十月八日　國家の施與？

國家は自ら、人民の生活の指導者に任じた。國家は人民に正義と平和と安寧と秩序と、日常の智的、及び、物質的缺乏の滿足とを約した。そしてその報償として、國家に仕ふるものは生存鬪爭の仲間入りから逃れ得た。かくて國家の奴僕が他人の勞力を利用し得るに至るや否や、敎會の牧師と同じ風に行動し始めた。

十月九日　利用と寄與

科學及び藝術が人類に寄與するところの多かつたのは、その敎師たちが（以前に於いては屢々、現在に於いては常に）自分達を勞働から逃れしめたからでなく、彼等のうちの天才が、これらの權利を利用しないで、人類の進步をたすけたからである。

十月十日　唯美的な快樂と善

唯美的な快樂は低級の快樂である。故に最高の唯美的な快樂も、常に人に何かの不滿を殘す。實際唯美的な快樂が高くなればなる丈け、それ丈け多く人に不滿の感を殘すものである。それは常に人をして益々それ以上の多くのものを要求せしめる。斯くしてそれには際限がない。唯道德上の善のみが充分の滿足を與へる。そこには十二分の滿足がある。それ以上は欲求されるべきものも、また缺けてゐる點もない。

十月十一日　他への嘘と自らへの嘘

他に對する嘘は、自らに對する嘘位に、重大なものでも、又有家なものでもない。他に對する嘘は屢々罪のない戯興であり、又虚榮心の一場の滿足でゞもある。自らに對する嘘は常に眞理からの背戻であり、人生の要求に背く事である。

十月十二日　勞働生活と發明品

もしそこに、蓄音機や、望遠鏡や、小說や、歌劇や、繪畫陳列場や、その他、そうしたものがあつたとしても勞働者の生活は、その中の何者によつても毫も改善されることはない。何となれば、凡てみな同じ不幸な境遇のために、それを如何ともすることの出來ないものだからである。

かくて遂に、これ等の驚くべき發見も、藝術の製作も、勞働者の生活を惡くはしないまでも、決してそれを改善すると云ふことはない。そしてこの事では科學者は凡て一致する。

十月十三日　實際的科學

凡ての學者は、原形質の發明や、星の分光器的分析などに導き行くところの、彼等の聖職に從事して居る。併しどうして斧に刃をつけるとか、どんな種類の斧が木を伐

るのによいとか、どんな鋸が最も使いよいとか、どんな麭麭粉でパンをつくらるべきだとか、何うすれば最もよく揑ねられるかとか、何うすれば、膨らますことが出來るとか、どんなにして暖爐を溫めたり据ゑつけたりするとか、どんな食物や飲物が陶器を使ふに最も便利がよいとか、どんな菌は食べても可いかとか、何うしたらば、便利にそれを食ひ得るかとか、云つた樣な事に關しては、科學は決して自ら勞することがない。もしくば殆んどそんなことはしない。

而も、凡てこれ科學の任務である。

十月十四日　科學の任務

科學の任務は人民に奉仕することである。吾々は電信や電話や蓄音機などを發明した。併し如何なる改善を人民の生活の上に行つたか。吾々は二百萬の昆虫の目錄をつくつた。併し吾々は、聖書の時代からこの方、一匹の動物を馴育したことがあつたか。凡ての吾々の家畜は馴育されたものである時に——そして今も尙、麋や、鹿や、鷸鴣や、松鶏や、山鷸などが野生のまゝである時に——。

十月十五日　吾等の藝術

多くの人々は偉大なる作家として喝采された。吾々は入念に彼等の作品を分析した。山なす批判を書いた。そして批評の批評を書いた。吾々は美術館に繪を蒐めた。そして缺くるところなく、その諸派の藝術を詳細に研究した。そしてまた吾々は吾々自身でさへ、非常な困難をもつてやつと聽き得るが如き交響樂や歌劇を有つて居る。而も吾々は、何ものを人民の俗傳や、傳說や、物語りや、歌謠に加へたか。何の繪を何の音樂を、吾々は人民の爲に加へたか。人民の爲めの、書物や繪畫は出版せられ、小風琴は製せられた。併し吾々は、その何れにか與つたことはない。

十月十六日　外科醫

外科醫は更にわるい狀態に在る。彼の假想的な科學はたゞ何事もしないで他人の勞

力を利用し得る人々のみを如何にして療治すべき乎を了解し得るが如き性質のものである。彼は、彼 科學的に活動し得んが爲めには數限りもない、高價な助手だとか、器械だとか、藥品だとか、療養院だとか、食料だとか、下水だとかを要する。一人の患者を療治せんが爲めに彼は、彼の給料の外に、この費用を負擔しなければならぬ幾百人を飢ゑのために殺さねばならぬやうこれに要する、そんな多額の費用を要求するのである。

十月十七日　民衆の科學及藝術

人々が科學や藝術をもつて人民に奉仕し得るのは、只彼等が人民の間に住み、人民の生活するのと同じ方法で生活し、何等の要求をも人民の上に負はさず、そして、人民が彼等を受けやうが受けまいが、凡てそれ等を人民の自由意志に任しておいてさて彼等の科學的及び藝術的奉仕を人民に提供した時にのみ限る。

十月十八日　忘れた事は神と共在したから

甚だ罕れな事ではあるが、而も偶々私が憐憫の情から善、眞の善をなした事があつた。左樣な場合にあつては、汝は果して如何なる事をなし、又如何なる事情の下にそれをなしたかを決して記憶してゐないであらう。汝は唯神と共に在つたと云ふ事丈けを覺えてゐるに過ぎない。（これは私が憐憫の餘りに人に與へて、永い間それがどこへ行つたか思ひ出せなかつた私の好きな長靴に關して起つた事柄である。）祈禱に際しても或は生活の中に於いても、自分が神と共に在る凡てそれらの瞬間は常にこれと同じである。記憶は肉體的の事柄である。然し此の場合に於いては、上述の事柄は精神的なものである。

十月十九日　人間の流動性

人間の流動性を、即ち同一人であるところの彼が、或る時は惡漢、或る時は天使、

或る時は賢者、或る時は白痴、或る時は強者、或る時は全く無能力者となると云ふこと、
とを、そのまゝ明白に表現せられてるやうな藝術品を書くことは、どんなに美しいこ
とだらう。

十月廿日　今日の科學及び藝術

吾々の世界に於ける科學及び藝術は、その最善の力を科學及び藝術に捧げんがため
に區別して居るところの全人類の精神的活動ではなくて、これ等の職業を獨占し、自
らを科學者若しくは藝術家と稱して居るところの、少數の群の活動である。それ故に
彼等は、藝術及び科學の眞の概念を顚倒して自己の職業に對する感覺を失ひ、そして
單に少數の寄生虫の群を樂しましむる事に從事し、彼等の堪えざる怠屈を救つてやる
に過ぎない。

十月廿一日　神の器としての人

人は神の器である。最初自分は、それは人が、自らその器をもつて働くべく召され
たのであると考へて居た。
今は働くのは人でなくて神であると云ふことを了解した。人間の務めはたゞ己れを
整然として居ると云ふことである。
絶えず磨かれて鋭利にされて居なければならぬ斧のやうなものである。

十月廿二日　貧者と藝術

日常の必要品の要求が人民の不幸の原因であり、病氣の根源であり、そしてまた、
その蔓延と難治との根源である。今や科學は分業の旗じるしの下に、人民を助くべき
選手を選んで居る。科學は、富豪階級の間には十分にその根據を据ゑた。そして治療
のために必要な凡てのものを買ひ得るそれ等の人々を、如何にして醫すべきかを探し

て居る。そしてまた人々を遣はして、またと一錢の貯へもないそれ等の人々をもそれと同一の方法をもつて治療せんことを欲する。併しそこには金がない。そこで、病氣にかゝつても金がない爲に、治療を受けることの出來ないそれ等の人民から、それを徵集しなければならなくなる。

十月廿三日　科學の有用となる迄

科學が眞に協力する時は、科學者や技師や外科醫等が、現に存して居るが如き分業でなく、と云ふよりは、寧ろ他人の勞力の剝奪をもつて、合理的だと思はなくなつた時、そして、かゝる人が勞働者と同じ境遇に入つて、同じ方法で生活せんが爲に、勞働者の間にやつて來て、そして彼等を治療せんが爲に、器械や技術や衞生に、彼の智識を適用するに至つた時、初めてそこにそれが有用となるのである。

十月廿四日　個人欲と社會正義

凡ての生存せる人々は、自らに質問をかけた。如何にして自分は自分自身の個人的生活の要求と、一切の人々の一般善とを要求する良心や理性とを調和すべきか、と。そして、この一般的苦惱からして、新しい生活形式が徐々としてゞはあるが、併し不斷に、益々多く、理性と良心との要求を滿足させながら進化發展して居る。

十月廿五日　眞の藝術の消滅

今日に至るまで藝術は常に、人生の教訓に仕へた（後には宗教と稱せられたが）そして人々がしかく高く評價した者はこの藝術であつた。然るに、――人間の運命に幸福の科學の代りに、宇宙的智識の科學が現出したと云ふ事實と共に科學それ自身の精神と意義とが失はれ、そして眞の科學が冷笑的に宗教と稱ばれる樣になつたので――人間の重要なる一活動としての眞の藝術は消滅した。

十月廿六日　無用なる科學及藝術

吾々は、吾々の所謂、科學と藝術とに忙殺されて居る。而も、吾々の忙殺されて居るものは、人々にとつて必要でもなければ理解もされない。それ故に吾々のなして居ることに科學の名も藝術の名も與ふる權利がない。

十月廿七日　眞の科學及藝術

今や吾々は、一切の超自然を拒否せる、極めて簡單明瞭なる標準をもつて居る。藝術及び科學は、社會の幸福のために、もしくは人類の全體の爲に、人類の精神的活動を充足すると約束する。――それ故に、吾々はたゞこの目的を懷抱し、そしてそれを獲得したものをのみ藝術及び科學と稱ふ權利があるのである。

十月廿八日　生命

人々は彼等の生命は肉體の中にある、身體の內部で行はれるところのものからして呼吸、榮養、血液の循環等から生命が現出するものと考へてゐる。そしてこれは本當の事のように見える、榮養や呼吸や血液循環をして停止せしめよ、然る時生命も亦終るであらう。だが身體の生命、此の體內の生命の終止とは一體何であるか……

そして實際若しも汝が、生命は自體の作用から現出して、唯肉體內にのみ在るものと考へるならばそれ自體の作用が停止するや否や、生命も亦終止すべき筈である。だがこれは確かに專斷である。何人と雖も、未だ生命は唯肉體の中にのみ存在して、肉體なくしては存在し得ないと云ふ事を證したものもなければ、又證明する事も出來ない。これを肯定する事は、恰も太陽が沒する時は卽ち太陽の終滅したものであると斷定するのと全然同じである。人は先づ生命とは何かを決定しなければならない。それは自分が他人に於いて見る、始まつて而して終るやうなものであるか、若しくは又自

分自身の裏で知るやうなものであらうか？　若しもそれが私自身の裏で知る如きものであるとするならば、然る時はそれは存在する唯一のものであつて、又それがために滅せられ得ないものである。そして、自分の前で、己れと他との生命を結合してゐたところの自體の作用が終ると云ふ事實は、唯自分には、自分の感觀的な眼から生命が何處かに飛び去つた事を示すに過ぎない。全然行き去ると云ふ事、亡ぼさせられてしまふと云ふ事、それは絶對に在り得ない事である。何となればそれ以外には世界に何物も存在しないからである。故に問題はかうなるであらう。自分の生命は滅してしまふであらうか、滅せられ得るものであらうか？　又は、人間の肉體の絶滅は、彼の生命の滅却した印しであるであらうか？　此の疑問に答へるためには、人は先づ生命とは何ぞやを決定する必要がある。

生命とは自分を他のものよりの分離の、他のものゝ存在の、及び自分を彼等より隔離する限界の意識である。自分の生命は肉體で限られてはゐないが肉體に存在する。然し睡眠する者、白痴、胎兒或は瘋癲病者には、自己別在の意識がない。

肉體の意識なしに生命のあり得ない事は事實である。だがそれは、生命とは自己の別在と自己の限界との意識であるからである、然しその自己の別在と自己の限界との意識は時間と空間内の我等の生活中に起るが、しかしそれは又、何か他の狀態に於てもあり得るものである、故に肉體の終滅は生命の終止の標とはならない。

十月廿九日　必要な只一事

たゞ一事が必要である――即ちそれは、何處に行つても彼等の家族を支へるのには餘りに少ないだけしか所有することの出來ない土地である。

十月卅日　生活の主要條件

土地の上に住み、それによつて自らを養ふことが出來ると云ふことは、幸福な、そして獨立な人間生活の主要條件の一つであつた、また常にさうであらう。これは萬人が知つて居た。又常に知つて居る。そして、それ故に、萬人はそれに類似したものでも

いゝからそんな生活に――丁度魚の水に向ふが如く――達しやうと常に努めた、そしてまたそれを努めることを決して止めないであらう。

十月卅一日　微さき一人になすは我になすなり

彼はこれを見て更に一層の恐怖を催した。而して腹の中で考へた。「傍へ行つて見ようか、通り過ぎて了はうか？傍へよると何かいやな事が起るかも知らん、どんな奴だか判らないからな、いゝ考へであすこに行つてるはづはない。若し傍へ寄らうものなら飛びかゝつて俺の首を締めつけて、放さないかも知らん。そんな事がないとしたところで、あんな奴に言葉をかけてどうしやう。あの様な裸の男に何をしてやる事が出來やう？あいつをつれて行く事も、自分の着て居るものを呉れてやることも、俺には出來ない！そんな事はべらぼうな事だ」

彼は急いだ、而してもうかなり遠く會堂を離れてしまつた時彼の良心は彼をつゝき始めた。彼は立止まつた。

「シモン！お前の今してゐる事はこりや何だ」と彼は自分に問うた「一人の人が凍えて死にかゝつてゐる。而してお前はそれにをびやかされて急いで其傍を通り過ぎた。それほどお前は自分の金を失ふのを怖れてゐるのか？！あゝ、シモンそれは正しくない！」

シモンは引返して其男の方へ行つた。

十一月一日　酒

「決してそんなものぢやありません」と小さい惡魔は答へた。「私の處方は全くちがつて居ます。私はたゞあの農夫に有餘る程作らせたのです。それだけの事ですよ。あのやうになる原素、即ち野獸の血が彼の男の中にいつもあつたのです——何時もあるのです——。

たゞ彼の男が食料になるだけの穀物を作つて居た間はその排け口がなかつたのです。おぼえてお居ででせうか、彼の男には唯一片しかないパン屑をなくしても不平を云はなかつた時もありました。けれど穀物のあまりが出來る位に、なるが早いか、自分の心もちを何う向けてよいかを考へなくなりました。そこで私が入り込みました。入り込んだ彼に新しい氣の向け方——即ち酒を呑む事を敎へました。その果ては、彼の男が神の賜物を怠惰の酒の中に滴らすが早いか、彼の男の體の中には狐の血も狼の血も豚の血も湧いて來たのです。そして一度酒の味を知つてからには彼の男は一生獸

物となつて居るでせう」

十一月二日　田園勞働と工場

工場勞働者の田園に還ることは、社會の富を減少すると云ふのは正當でない。何となれば田園生活は勞働者をして、その幾分の時を家に在つて、もしくは工場にあつてさへ、工藝品の製産に參じ得ることの可能を排除しないから。

十一月三日　眞　愛

で、男は話し出した。銀行へ金を持つて行く途中、彼はネタラーソフにでくわした。ネクラーソフは彼に自分の家へ行つてカルタをやらうと言ひ出した、それから二人でやつたところが彼は一文なしに負けてしまつた。で、彼はもう自殺しようとまで決心したと。彼は自殺しようと決心したとは言つたが、彼女には彼がちつともそんな

決心なんかしたらしく見えなかつた。唯彼が絶望の餘りいろんなことを考へたのだらうと思つた。彼女は終ひ迄聽いてゐたが、彼が話し終ると「何とまあ阿呆らしい、馬鹿げたことでせう。（偶然）カルタに負けてお金を取られるなんて、なんといふ頓痴氣でせう！」

「うんと叱つてくれ。俺をどうともしたいやうにしてくれ。」

「私決して惡口なんか言ふつもりぢやありません、貴方がたとへどんなにくだらない、意氣地なしでも、私は今迄扶けて來たやうに貴方を扶けてあげたいのです。」

「あゝ俺を打ツ叩いてくれ。どうせもう長いことは無い。」

十一月四日　正　直

ターネチカが子供部屋を駈け拔けようとすると、不圖自分の後ろに啜り泣の聲が聞えたので、ひよいと振返つて見ると、ウオーカが自分の寢臺の傍に立つて、玩具の馬を見ながら、手に皿を持つたまゝしくしく泣いてゐるのであつた。皿には何もなか

つた。

「兄ちやん、奈何かしたの？兄ちやん、あのお菓子は？」

「あたい、あたい、偶然途中で食べてちまつたの。あたいもう行かない……何處へも行かない……ターちやん！あたいほんとに偶然……みんな食べちまつたの……始めは些つとだつたけれど、おしまひには皆食べちまつた。」

「では、どうしませうね？」

「あたい偶然ね……」ターネチカは凝ツと考へ込んだ。

ウオーカはぼろ〳〵と涙を出して泣いた。ターネチカは不意に晴々した顏になつて、

「兄ちやん！いゝことがあつてよ。兄ちやん泣かなくつても好いことよ。婆やの所へ行つてね、偶然食べちまつたと言つて、勘忍してお貰ひよ、明日になれば私達のを婆やに上げるから好いわ、婆やはいゝ人だもの……」ウオーカは泣き止んで掌や手の甲で涙を拭いた。

十一月三日　人物と言葉

沙翁の戯曲のどれを讀んでも、予は讀み出すと直ぐから、彼は性格描寫の、唯一の手段ならぬまでも、最も重要な手段を欠いて居ると云ふことを深く感ずる。それは言葉の上の個性である。即ち各人物の口吻は、自然にその人の性格に應じたものであらねばならぬと云ふことだ。沙翁にはそれがない。彼の人物は皆人物自身の言葉を使はないで、何事も同じ樣に沙翁式の不自然な他所行きの言葉をつかふ。その言葉たるや單に曲中の人物が云ひそうなことでないと云ふばかりでなく、過去にも現在にも、生きて居る、人間が口にする樣な言葉ではないのである。

十一月六日　人の子

「人の子」と云ふ句を用ひて耶蘇は、一切の人は善及び理性への共通の衝動をもつて居る、そしてそれが善に導くと云ふ事を敎える。

「人の子」とは「神の子」のことだと證明するのは皮層である。「人の子」の言葉をそれが意味するのとは異つた意味にとるのは、耶蘇がその言はんと欲することを云ふに當つて故意に全く別の意味をもつて居る言葉を用つたのだと確言することである。しかし、たとひ敎會の語るが如く「人の子」が「神の子」を意味するとしても「人の子」の句は同時にまた人にも適用される。何となれば耶蘇は凡ての人々を「神の子たち」と呼んだからである。

十一月七日　根なき花

道德を宗敎と離れたものとせんとする企は、恰も子供達が彼等を喜ばす草花を移し植えようとして――彼等を喜ばさず、又、彼等にとつて用のない根から、それをもぎ取つて、根なしで地面にそれを突き差して置く時のやり方に似て居る。宗敎の根底なくしては丁度根なくしては、眞の草花のあり得ないやうに、そこには眞の道德はあり得ないのである。

十一月八日　單純な表情

ピエールは何處までも無骨であつた。肥つて、脊丈が普通よりも高く肩幅が廣く、手が大きくて赤い此青年は、所謂「客間へ這入ること」も下手であつたが、又出る事も劣らず下手であつた。つまり出て行く時に何の特別に氣持ちのよい事を言ふことが出來なかつたのである。其上に彼はぼんやりして居た。立上る際に自分の帽子の代りに、將軍の徽の羽毛の附いた三角帽を取つて將軍が返して呉れと云ふまで羽毛を引つ張り乍らぢつとそれを抱へて居た。併しそのぼんやりして居る事も客間へはいつて話す事の下手なのも悉く、人の好さゝうな、謙遜した單純な表情によつて僕につぐなはれたのである。アンナは彼の方へ振り向いて、基督教徒らしい謙虛の表情を以て、今夜の彼の非禮を許した。

十一月九日　戰爭

「いゝえありません。併し僕かういふ考へが浮んだから、あなたにお話し樣と思つたんです。目下ナポレオンを向ふにまわして戰爭が始まつて居るでせう。で若し此れが自由の爲めの戰ひであつたなら僕は承知です、僕は眞つ先に立つて軍務に就きます。併しイギリスやオウストリヤを助ける爲めに、世界最大の人を敵にするのは……それはよくないです。」

アンドレイ公爵はピエールの此子供らしい言葉に肩を縮めて、そんな馬鹿々々しい事をする譯に行かぬといふ顏つきをして見せた。併し實際の處無邪氣な問に對してはアンドレイ公爵が言つたやうに言へる外何とも考へやうが無かつたのである。

「若し皆んなが自分の信念にのみ依つて戰爭したなら、戰爭と云ふものも無かつたらうね。」

と彼は云つた。

「それこそ本當に結構ぢやありませんか。」

アンドレイ公爵は苦笑ひして、

「それこそ結構だといふのは、大いに道理あることかも知れない。併しそんな事は決してあるまいよ。」

「ぢやあなたは何の爲に戰爭に出るんです？」

とピエールが訊いた。

「何の爲め？僕は知らないねえ。さうするのが當然だからさ。が其他に、僕が戰爭に出るのは……」

と彼は一寸間を置いて、「僕が出る譯は、今此處で僕の送つて居る生活が——此生活が僕の氣に向かないからだよ！」

十一月十日　結　婚

「君、決して、決して結婚なぞし給ふな。僕は君にかう忠言しておく。君が自分で何

もかもし盡したと考へるまでは必ず結婚し給ふな。又君の撰擇した女に對する愛がなくなつて其女の眞相をはつきりと見拔くまでは結婚し給ふな。でない、君は手酷い取り返しのつかぬ樣な錯誤に陷るから。もう何の役にも立たぬ老爺になつてから結婚するんだね……でないと君の持つて居る勝れた物高尙な物がすつかり亡びて了ふ。すべての物が粗末な事物の爲めに傷けられて了ふ。さうだよ、さうなんだよ！そんなびつくりした樣な顏をして僕を見なくてもいゝぢやないか。若し君が前途に於いて何か自分から期待してるなら、今に君は人生の一歩毎に悟らされるだらう。君にとつて一切のものは、終りを告げ、戸を閉されて、殘つて居るのはたゞ社交界の客間ばかりだから、其中で君は宮中附のボーイや馬鹿者と同じ板の上に立たねばならないのだ……」

十一月十一日　男の自由を奪ばうな

「君には僕が何故こんな事をいふか分らないだらう。」と彼が續けた。「實際これは一つの立派な人生史だからね。君はよくボナパルテと其功業を說くが、」と彼は言つ

た。その癖ピエールはボナパルテの事など言つた事もないのだ。「然しボナパルテも一生懸命に働いて、一歩々々自分の目的に近附いてゐる時は自由だつた。自分の目的より他何物もなかつたのだ――だからして彼は其目的を達した。所が一旦女に關係すると、まるで釘附けにされた囚人の樣に一切の自由を失つて了ふ。さうなると人は自分の持つて居る希望とか力とかいふ、一切の物を只重荷のやうに感じて、後悔の爲に責め苛まれるのだ。客間、蔭口、舞踏會、虚榮、無意味な粗末事――かうした魔法の圈が四方から蝟集して。僕は其中から逃れる事が出來ない。僕は今戰爭に出かけ樣として居る。それは未曾有の大戰爭だ。所で僕は何にも知らないから何の役にも立ちやしない。僕は非常に愛嬌のある男だが、又非常に皮肉屋なんだよ、」と彼は語り續けた。

十一月十二日　女

「だからアンナさんの所でも皆が僕に傾聽するのさ。あれが又馬鹿々々しいお仲間な

んだ、けれど妻だのあの女達はこれがなくては生きて居られないんだからね。一體あのすべての卓越したる婦人達や、それから一切の女といふものが、何んなものだといふことが君に分つたらなあ……僕の父がいふ事は本當だよ。利己主義、虚榮心、暗愚そして萬事に就てのやくざさ加減……それが女なんだよ。それがありのまゝの正體をさらけ出した女なんだ。社交界に出て居る所を見れば、何かある樣な氣がするけれども皆んな何にもありやしない！全く君結婚し給ふな、結婚しちやいけない。」

十一月十三日　藝術と勞力

あらゆる舞踏、演藝、歌劇、小樂劇、展覽會、繪畫、音樂の演出若しくは凡ての書籍の出版の爲めには非常に多くの人々の强大な而かも好ましくない勞力が、時には有害な、恥ずべき程の仕事を要するのである。藝術家が自分自身でその要するもの一切をなすのであればまだしもよいけれど、事實に於いて彼等は、悉く單に藝術品製作の目的のみでなく自己の不斷の贅澤な生活のために職工の援助を必要とするのである。

而かもどんな事をしても彼等はそれを得るのである。或は富豪からの報酬に依るか、或は政府から與へられる補助金に依るか、いづれにしても（ロシヤでは例へば劇場や學館や學士會院へ下す額は實に何百萬ルーブルに上つてゐる）此金は實に人民から集めるのである。その人民の中にはたつた一疋しかない自分の牛を賣つてまでも税を拂はなければならない人もある。而かもさう云ふ人ほど藝術の與へる美的快樂を味うことが出來ないのである。

十一月十四日　賢者の言を誤解して

野獸でさへ、お互の必要の妨害をし合はないで野の草をはむ。そして人々は神自身が彼等に如何にして眞の生活を送るべきかを指示したと確信しながら、彼等のわるい道に迷ふ。そしてこれよりほかの生き方がないと云ふ。もしも田園に於ける人民が賢者の言葉をきゝながらもなほ以前の如き生活をつゞけ、お互の口からパンを摑みとり鬪ひ、そして結局彼等自身の損失となるにも拘らず、凡ゆるものを摑まふとするならば、どんなに彼等を考へていゝだらうか、吾々は云ふだらう。彼等は賢者の言葉を誤解したのだ。そして物事をその眞の姿とは異つた風に想像したのだと。

賢者は言つた。「汝等のこゝに於ける生活は非である。汝等の道を改めよ。然らば善になるであらう。」と、すると彼等は想像した。賢者は彼等の田園生活を非難したのだと、そして何處か他のところのより善き生活を約束したのだと。田園はほんの一時の住所にすぎない。こゝでよき生活を送らうとするには當らないと。

十一月十五日　藝術家の自省

更に一層必要な事は、良心ある各々の藝術家が、自分のしてゐる事を總べての眞に意味のあるやうにする事である。自分が立派な作品を創作してゐると云ふ僞つた信念を彼の心に起さすのは、單に彼が交つて生活してゐる人々の小さな團體の眩惑ではないと云ふことを知ることである、時としては非常に贅澤な生活を保持するために、他人から得る助けは、自己の作り出す藝術品で償ふに足るものであると云ふことを知る

ことである。

十一月十六日　美と善

美しいと云ふ語は、人、馬、家、眺望、動物に就いて云へる。行爲や思想や品性や音樂に就いては、若しそれが吾々を喜ばすものであれば、善と云へるし、若し吾々を不快にすれば惡いと云へる。けれども美しいと云ふ語は視覺を喜ばすものに關してのみ用ひられるのである。それゆゑに「善い」と云ふ言葉及び其概念は「美しい」と云ふ概念を含んでゐる。併しその反對は場合が違ふ。「美しい」と云ふ概念は「善い」と云ふ概念を含んでは居ない。

十一月十七日　趣味と藝術

何故或者は梨を好み、他の者は肉を選ぶか、と云ふ議論は榮養の要素は何であるかとの定義を見出す助けとはならないと同じやうに、藝術に於ける趣味問題の解決（藝

術論は自ら此處迄來る）は、吾々が藝術と呼ぶ此特殊な活動は何に基因するかを明瞭ならしめる助けとならないばかりでなく、斯樣な說明を全然不可能ならしめるものである。そして終に吾々をして、全局を混亂せしめ、あらゆる種類の藝術を判斷する概念から遠からしむるに至るのである。

十一月十八日　藝術と人生

藝術を正確に解釋しようとするには、先づ第一に藝術を快樂の手段であると考へるのを止めて、人生の一條件であると考へなくてはならない。かういふ風に藝術を見て來ると、先づ藝術が人と人との接觸の一手段であることに氣付かずには居られないのである。何れの藝術品も、その藝術品を作りつゝある人と、その人と同時にか又は前後してか、作者と同樣の藝術的印象を受けるあらゆる人々の間にある種の關係を結ばしめる。

十一月十九日　言葉と文藝

人の思想及び經驗を傳達する言語は人間を融合する手段で、文藝も亦同じ働きをする。言語に依る交際から區別されてゐる此後者の接觸手段の特質は次の事に存する。即ち言葉は思想を他人に傳へるのであるけれども、文藝は感情を他人に傳達する手段である。

十一月廿日　藝術の感染力

藝術活動は人が聽覺及び視覺に依つて他人の感情の表現を感受して、その表現者の感動されたと同じ情緒を經驗することが出來ると云ふ事實に根底に置いてゐるのである。

極く單純な例を一つ取つて見るに、或る一人が笑ふと、それを聞いてゐる人も愉快になる。又或る一人が泣くと、それを聞いてゐる他の者も悲哀を感ずる。一人が激昂

してプリプリすると、之を見て居る他の者も同じ心的狀態になる。人は自分の動作又は音聲に依つて、元氣や快心や或は悲哀や沈靜を表はす。そして快心的狀態は他人に移つて行く。

人が呻吟や痙攣で苦痛を表はしてゐると、此苦悶は他の人々へ自づと移つて行く。又人が或る事物、人物又は現象に對して崇敬、熱心、恐怖、尊敬、乃至は愛の感情を表はすと、他の人々も同じ事物、人物、現象に對する同じ崇敬、熱心、恐怖、尊敬、乃至は愛の感情に感染する。

十一月廿一日　物と死

耶蘇は吾々に告げる。人生の意義は吾々の持つて居るものや、蓄積して居るもの〻中にはない。それは全く異つた何物かのうちに在る。彼は云ふ。

「或る富める人の田畑よく實りければ自ら思ひ云ひけるは、我が作物を藏むる所なきを如何せん。又云ひけるは、我かくなさん。我が倉を毀ち、更に大なるを建て、凡て

わが作物と實とを其所に藏むべし。かくて靈魂に對ひ、靈魂よ、多年をすごほどの多くの寶物を持ちたれば安心して食ひ飲み樂しめよと云はんとす。然るに神これに云ひけるは、「愚なる者よ、今夜爾の靈魂取らるることあるべし」と。

十一月廿二日　藝術と藝術活動

若し觀者又は聽者が作者の感じた感情を感染しさへすれば、それは藝術である。人が一度經驗した事のある感情を、自分自身に喚起した以上、次には動作や、線や色や言語等の表現形式でその感情を同樣に經驗する事の出來るやうに他人へ傳へるのは――これ藝術活動である。

十一月廿三日　藝術と人生

藝術は哲學者の云ふ樣に、ある神秘的な美の觀念乃至は神の表現ではない。又美學的生理學者の云ふ樣に、累積力の餘贅の放散する遊戯でもない。外的符號に

よる人の情緒の表現でもない。そして特に云つて置かなければならない事は、藝術は快樂ではなく、同一感情で人々を結びつけて、人と人との一致を圖る手段で、人生並びに個人及び人類の幸福への進歩に必要缺く可からざるものであると云ふ一點である。

十一月廿四日　藝術の力

人は誰も皆言語で思想を表現する能力のあるお蔭で、前時代に思想の領域で、あらゆる人類に依つて人類の爲めに爲された事を悉く知る事が出來る。又、現在他人の思想を理解する此能力あるために、彼等の活動の共有者となれる。又同時代の人或は後繼者に、自己の內に湧いた思想並びに、他人から同化して自己のものとした思想を傳へることが出來る。之れと同樣に人は藝術に依つて、他人に感染する能力あるお蔭で同時代の人が味つた總ての事にも、又は數千年前に人々が經驗した感情にも近付く事が出來る。だからそれと共に、彼は彼自身の感情を他人に傳へる可能性をも持つて居

るのである。

十一月廿五日　宗教と藝術

人類はより低い、より偏頗な、より曖昧な人生の理解から、より普遍的な、より道徳的な人生の理解へ前進して行く。そして其處には、いかなる運動に於ても見られる如く、指導者なるものがある——彼等は他の人々よりも一層明白に人生の意義を理解してゐる人々である——さう云ふ進歩した人々の中には、常に言葉で、さもなくば生活で、此意味を他人よりは一層明白に、平易に力強く表現してゐる者がある。人生の意義に關する彼の表現は常に、そのやうな人の記憶の周圍に自ら形造られる。從つてそれは迷信、傳說、儀式と云ふやうなものと結び付いて、宗教と云はれるのである。

十一月廿六日　宗教とは何ぞ

宗教とは與へられたる時代の與へられた社會に於ける最も進んだ人々に入り易い最

も高い人生觀照の表明に外ならない、その社會に於ける其他のものは皆其人生觀へ向つて進んで行かなければならないのである。であるから獨り宗教のみ常に人間の情操の評價の根底となつて來たのであるし、現に又なつてゐるのである。若し感情にして人をその持つてゐる宗教の示す理想へ近づけ、其理想と調和して矛盾することがないならば、其感情は善である。若し感情にして、人を理想から遠ざけ、それに反對するならば、その感情は惡である。

十一月廿七日　中世の藝術

多數の人々と同じやうに、前と同一な感情——宗教——に依つて生氣付けられて、建築に、彫刻に、繪畫に、音樂に、詩乃至劇に、自己の經驗した感情又は精神狀態を傳へた中世の藝術は本當の藝術家であつた。その時代に受け納れられ、而も全體の人間に共通した最も高い觀念の上に打ち立てられた彼等の活動は、現代から見れば卑しむべき藝術ではあるが、而かも社會全體が共有してゐた、一個の眞實なるものであつ

十一月廿八日　藝術を味ひ得る者

吾々の有する藝術は藝術の全體であり、眞の唯一の藝術である。而かも尙は人類の三分の二（亞細亞、亞弗利加の人民全體）は此唯一の優れた藝術に就いては何も知らないで生死する。吾々の基督教社會でも百分の一の人々すら殆んど藝術全體であると云つて居る此藝術を利用してゐない。後の百分の九十九迄の人々は勞働の爲に苦しめられ、而かも獲得することは出來ても少しも理解されさうにない性質を帶びた此藝術を味はふことなしに時代を追つてつぎ〳〵に生死するのである。

十一月廿九日　生活

此の新しい人生觀、もしくは悔改は耶蘇の敎理の隅石である。此の敎理に從へば、

百姓達がその主人に對して支拂無能力者であると云ふことを、また、過去現在未來を通じてその支配者と契約した負債を支拂ふことが出來ないと云ふことを了解すべきであつた如く、人々も亦、その自らの支拂不能力者であることを了解し感得しなければならぬ。彼等の生きて活る瞬間は凡てみな此の負債の償却のためであると云ふこと、そして誰でも利己的生活によつて此の義務を拒むものは、生活の原理から離れて行くものであり、かくてまた、生活の權利を失つてしまふものであると云ふことを感ずべきである。人はみな、彼自身の生命、即ち、彼の個人的生命を救はふとすれば、耶蘇が屢々云つたやうに、眞の生命を失ふと云ふことを記憶せねばならぬ。

十一月卅日　現代の藝術

勞働者の大多數に取つては、吾々の藝術は高價を要する故に近附き得ないものである。又大多數の人類に取りては、勞働生活の條件と遠くかけ離れた人々の感情をその儘傳へるのだから、彼等には緣遠いものである。富豪階級の人々に取つては享樂であ

るものも、勞働者に取つては快樂としては理想されないから、何等の感情をも彼等の心に起させない、さもなくばその藝術に依つて飽滿した怠惰者の心に起る感情とは全く反對の感情を起させるに過ぎない。

十二月一日　新しい感情と藝術

主題の貧弱――は嘗て經驗せられなかつた新しい感情を傳へる藝術のみが眞の藝術品であると云ふことのために生じたものである。つまり思想の產物は新しい概念なり思想なりを傳へて前から知れて居る事を繰り返すことをしてばかりゐない時にのみ眞の思想の產物である樣に、藝術品も亦新しい感情（假令意味のないものであつても）を人生の流れへ注入する時にのみ純な藝術品である。この事實は子供や青年が今迄經驗しなかつた感情を初めて傳へて與れる藝術品から非常に强い印象を受けると云ふ事實を證明するものである。

十二月二日　宗教的感情

宗教的知覺から流露する生々とした感情の變化は無限である。而もその感情は總べて新らしい。それは宗教的知覺が將に存在されんとしてゐるものゝ最初の指標、云ひ

換へれば人と其周圍の世界との關係に外ならないからである。けれども之に反して享樂欲望から流露する感情はたゞに制限されてゐるのみでなく、それは又、昔から經驗され表現されてゐたものである。隨つてヨーロッパの上流階級の無信仰は最も貧弱な主題の上に培はれた藝術を彼等に殘すに至つた。

十二月三日　主題の狹少

上流階級の藝術の主題の貧弱は、それが宗教的でなくなると同時に又一般的でなくなつたと云ふ事實のために一層の度を增した。更に又此事實は藝術の傳へる感情の範圍を狹くした。何となれば生活維持の爲めの勞働を少しも經驗した事のない、權力を持ち財產を持つた人々の經驗する感情の範圍は、勞働者が生れながらにして持つてゐる自然の感情の範圍よりも遙かに貧弱で狹くて、無意味だからである。

十二月四日　普遍藝術と特殊藝術

ギリシアの或藝術家やユダヤの豫言者の如き普遍的な藝術家がその作品を作る時に云はなくてならない事は、當然之を彼の所產として萬人に理解されねばならぬやうな風に傳へる事に努力したけれども、或藝術家が特殊な狀態に置かれた人々の小さい集合體の爲めに否單に一個人のため、又は宮廷人の爲めに――法皇や大僧正や領主や女王や乃至女官――作をした時には、彼は當然自分が充分よく知つてゐる人々に、卽ち彼の熟知してゐる特殊な狀態に生活してゐる人々に、影響を及ぼすことをのみ目的とした。而かもこれは前者に比較して一層たやすい仕事であつた。かくて藝術家は知らず〳〵の間に學問ある人々にのみ理解する事が出來て、他の人々には解らない引喩を用ひて、言はうとするところを表現するやうに導かれた。

十二月五日　藝術の普遍性

藝術はそれが發達の程度及び教育の程度と關係なく人々に作用すると云ふ事實、及び繪畫、音響、形式の魅力は如何なる發達の程度にある人にも感動を與へると云ふ事實が存するので、準備と或一定の連續した智識（これあるが故にこそ幾何學を知らない前に三角術を學ぶことが出來ないのである）を要する理性活動とは異つて居る。

藝術の務めはまさに此點――論理形式では理解もされないし、近づき得られもしないものを理解させ感ぜしめる――に存する。概して本當の藝術的印象を感受する人は物を表現することの出來る以前に先づそれを會得して居る樣に見える。

十二月六日　僞藝術創作の順序

上流社會の藝術は普遍的藝術から分れた結果、題材が貧弱となり形式が惡くなり一層理解のないものとなつたばかりでなく、時の進むに連れて全然藝術でなくなり藝術

の僞物にその位置を奪はれて終つた。

これは次のやうな原因に基いたものである。即ち普遍的藝術は強い情緒を經驗したある一人の者がこれを他人に傳へるの必要を感ずる時にのみ生ずるものであるが、之れに反して富豪階級の藝術は藝術家の內的衝動から起るのでない。それは主として上流階級の人々が娛樂を要求し、且つこれに充分な報酬を與へるところのものである。彼等は藝術に快感の傳達を要求する。そして藝術家はこの要求に應じようと試みる。けれどそれは非常に困難な仕事である。何となれば富豪階級の人々は遊惰と華奢との間に生活して絕えず藝術に依つて樂しみを求めようとして居るからである。所が藝術は最も卑俗な藝術でも自由に作られるものはなく、藝術家の內的自我の中に自ら生じなければならないものである。從つて藝術家が上流階級の人々の要求を滿足させるには模倣的藝術品製作の方途に出なければならない。そして又實際にさういふ方法が講じられたのであつた。

その方法とは（一）借用する事（二）模倣すること（三）感動させる事（効果本位）（四）興味を與

へる事の四つである。

十二月七日　技巧

藝術家にして若し血の滴つて居る創傷を立派に畫くとすれば、その光景は私は驚異せしめるであらう。けれどそれは藝術でない。

力強いオルガンの長い一つの調子は著しい印象を與へるであらう。否時々は涙をさへ誘ふであらう。けれどもその中には何等の音樂もない。蓋し感情を少しも傳へてゐないからである。而も斯樣な生理的効果が絶えず吾々のサークルの人々から藝術であると誤解されて居る。そしてこの事實はたゞに音樂に止まらない、詩にも繪畫にも戯曲にも見える。

十二月八日　批評家

私の友人の一人は批評家と藝術家との關係に云ひ及んで、冗談交りに次の如く解釋

し。定義した。

「批評家とは賢者を論ずる愚者である」

此の定義は偏頗で不正確で粗暴に失して居るとは云へ、尙一部の眞理を含んで居り批評家とは藝術品を説明し得る人々であると解する定義よりはどんなに正しいか知れない。

十二月九日　説明と表現

藝術家の作品はこれを解釋することは出來ない。若しも藝術家が傳へやうと欲した事を言葉で説明することが出來るとしたなら彼は恐らく言葉で自己を表現したであらう。彼が藝術に依つてそれを表現したと云ふのは、たゞ彼の經驗した感情は他の方法に依つて之れを傳へることが出來なかつたからに外ならない。

十二月十日　内驗と外顯

それは總ての藝術の場合に於いて同じである。ほんの僅か明いか、ほんの僅か暗いか、右か左かのほんの僅かの高低が繪畫では大切である。又音調のほんの僅かの高低が音樂には大切である。又ほんの僅かの遲速が演劇には重大事である。又ほんの僅かの省略や語調の弛め過ぎや誇張が詩には大切である。そして其處には何等の感染もない。感染は藝術家が藝術品を構成して居る無限に微細な度合を發見する時にのみ尙又その發見の程度に基いてのみ得られる。從つて外的の方法は人が自らの感情に從ふ時にのみ發見される。

十二月十一日　社會的方向

一社會の宗教的知覺は丁度流れる河の方向のやうなものである。若し河が本當に流れるのなら何處かへの方向を取らなければならない。若しも社會が存續するのなら、

其處には多少なり意識的にその社會の人々が向つて行く方向を示す宗教的知覺がなくてはならない。

十二月十二日　本當にわるい事

教會の一長老の言に曰く、本當に大きな惡弊とは人々が神を知らないと云ふことではなく、神の代りに神でないものを造り上げたと云ふ點であると。藝術の場合も亦同じである。

十二月十三日　宗教、道德

宗教とは、人によつて、彼の分立せる個人性と無限の宇宙及びその根元との間に設けらるゝ或る一つの關係である。そして道德とは、人生に對するその宗教より結果する常住の指導である。

十二月十四日　靈交の喜び

人は誰でも自分の感じて居る事を他人が感ずれば喜ぶものである。自分と其處にゐる凡ての人々の間に出來た交通、及び、尙同じ印象を受けるらしい現存する凡ての人々との交通を喜ぶものである。それにも增して人は尙同じ感情で動かされた過去の人々全體、及び、その感情で尙動かされるであらう所の未來の人々全體と、吾々とを結合する交通を思つて神秘的な喜びを感ぜずにはゐられない。そして此の力を生むものは神及び隣人に對する愛の感情を傳へる宗教的藝術と萬人に共通な最も單純な感情を傳へる普遍藝術との二つである。

十二月十五日　眞の基督者

ルチツトスキイに從へば基督者は治者になることも出來なければ軍人になることも出來ない。また彼は政府者の仲間入りをすることも商人になることも地主になることすらも出來ない、彼はたゞ工人もしくは勞働者たり得る。

十二月十六日　神の國到來

先きに行はれた諸宗教の規則の代りに、此の教は耶蘇基督の人格の中に永遠の完成と眞理とそして愛の理想とを提出した。そして此の內的な完成の結果は豫言者によつて豫告されたる外的完成となる樣に人間によつて到達され得ると宣告された。――即ち神の國の到來。その時に凡ての人は敵意を忘れ、凡ての人は神によつて敎えられ、愛によつて結合せられ、そして獅子は小羊と共に臥るであらう。

十二月十七日　誤解されたる基督敎

基督の敎理は希伯來及び異敎國のたゞ中に表はれたのであるが大多數の人々によつて受納れられなかつた。何となれば彼等は此の新しい敎の要求したのとは全く違つた生活を送つて居たからである。同時にまたそれを受納れた僅かばかりの者も、それが

凡ての先在の觀念と全く反して居たのでそれを十分の意味に於いて了解しなかつた。

十二月十八日　不思議

丁度今一人で坐つてゐた。そして人々が離れ〳〵に生きて居るのが大變不思議な事に思はれた。人々――スタソフのことを思つた。今どうして生きてゐるかしら。何を考へたり、感じたりして居るかしら。又、コリチクのことも。

そして彼等人々は皆生きてゐる。そして自分は彼等の中に生きてゐない。

彼等が自分に閉されてゐると云ふ知識が、大變不思議な、又、新奇なものになつて來た。

十二月十九日　基督教と奇蹟

基督の教がはつきり解らなくなればなる程それは奇蹟によつて不純にされた。それが奇蹟的になればなる程、その原始的意義からかけ離れしめ、その意味を益々混亂せ

しめた。そしてそれが混亂し、最初の意味から遠ざかれば遠ざかる程、その了解される事が益々少なくなつた。そして或る人々にとつては彼等自身の無誤謬を肯定することが益々必要になつた。

十二月廿日　基督教と教會

教會は神聖である。そして基督によつて建てられた。神は人々に彼の教を勝手に解釋する事を許さない。それ故に彼は教會を建設したのだ。凡てかゝる前提は、私がそれを駁論する事をさへ恥ぢる程にも誤つて居りまた根據がない。教會自身の斷定の外何處にも神もしくは基督の何れもが宗門者の所謂教會と稱するものに爪の垢ほどでも似よつたものを建てた形跡がない。又それに就いて何等の證據の示されたものがない。福音書のうちには外的權威としての教會に反對する樣な暗示がある。その最も直接にして自明なる節は基督の弟子たちが何人をも主と稱んではならないと告げられたところの節である。しかし宗門者等が教會と稱んだやうなものゝ建設について言はれ

たところは一つもない。

十二月廿一日　暴力は暴力を破り得ず

君たち勞働者が、自分では少しも働かないところの他の人々をして、君たちの生産するもので儲けさゝんがために、その一生涯を貧乏の間に過さねばならずそして君たちに必要でない烈しい仕事をしなければならないと云ふことは――即ち君たちが彼等の奴隷であると云ふこと、そしてさうあつてはならないと云ふことは――苟も眼と心とをもつて居るものならば誰にもわかりきつたことである。

しかしそんな風にならさない爲めには一體何うすれば可いのか。

最初の簡單でそして自然な解決は――それが往時から現はれた樣に――君たちの勞働から不法な儲をして居る人々の儲けを彼等から暴力をもつて奪はねばならぬと云ふことである樣に見える。最も舊い時代に於いて羅馬の奴隷がかくの如くやつた、また中世紀には獨逸や佛蘭西の百姓がかくの如くやつた。露西亞でも亦、ステンガシエジ

ンや、プウガチョフの時代に人民が屢々かくの如くやつた。今もなほ時として露西亞の勞働者が斯くの如くにやる。

此の方法は何者よりも先きに害されて居る勞働者にまで示される。而も此の方法はたゞにその目的を達しないばかりでなく、寧ろ常に勞働者の運命を改善するよりも益々わるくする。政府の力が今日の如く強くなかつた往時に在つては、人はかゝる暴動をもつて成功するの望みがあつた。しかし莫大なる資金や鐵道や電信や警官や憲兵や兵卒やなどが政府の手に在る今日に於いては、凡てこんな試みは止んでしまふ。ボルタワやハアコフの政府に於ける暴動が暴動者を苦め處刑することによつて止んだ樣に。そして勞働者に加へられる非勞働者の力が更に更に永久的に確立されるばかりだ。

十二月廿二日　順序

若し或る人にして、彼の從事して居る事件を完成せんがために働らいて居る風をせず、實際に働いて居るのなら、彼の行動はその仕事の性質によつて定められたる或る

順序に從つて必然的に運ばれて行くであらう。若しその仕事の性質上、最初に成されねばならぬ事を後にのばすならば、もしくは或る本質的なる部分を省略してしまふならば、彼は慥かに嚴肅に働らいて居るのではない、たゞ働らいて居る風をして居るのである。此の法則は、その仕事が生理的であらうが精神的であらうが、不變に眞理である。パンをやくにしても、先づ粉を揑りそれから窯を熱し灰を掃ききよめと云つた順序にしなければ本當にやけない樣に、善い生活を送るにも亦、その必要は性質を獲得せんがためにある順序を採用しないでは決して成功することが出來ない。

十二月廿三日　自ら改めよ

その場合不思議なことは、これ等の人々が人々の間に於ける快樂の分配が平等でないと云ふことを知り、その不平等を惡と見、そしてそれを匡正せんことを欲して居るにも拘らず、而も彼等自身の快樂を增大せんことを――即ち快樂の分配の不平等を增さんとすることを努むるを止めないことである。かくすることは、恰も、一番眞先きに櫻の園に驅け入つてその手を延すことの出來る限り急いでその實を集めながら、而もその櫻の園の實を彼及び彼の後に來れるもの〻間に平等に分配せんことを欲する樣なものである。

十二月廿四日　自　制

自制は情慾から人を解放するものである……しかし人の情慾は澤山で多樣である。で、それ等と戰つて勝つのには、その根本的なもの――その上にもつと複雜なものが生成するところの――から初めねばならぬ。根本的なもの〻上に生成したるものと複雜な情慾から始むべきでない。そこにはおしやれだとか狩獵だとか娯樂だとか、無駄口だとか、穿鑿ずきだとかその他多くの複雜なる情慾がある。また貪慾だとか、怠惰だとか性的戀愛だとかの根本的情慾がある。

十二月廿五日　何を爲すべきか

何か爲されねばならぬか。何か正になされねばならぬか。何人も問ひつゞける。そして私も亦これを問ひつゞけた。然るに私は私自身の職業を高く見た關係からして、私の最初の、そして疑ふべからざる仕事は、私の生活の料や衣服や燃料や家屋やその他のものを儲け出すことであり、そしてこれをなす事によつて、自分自身に仕ふると共に他人にも仕へる事である――と云ふことを見なかつたのだ。

此の一つの仕事のうちに人は――もし彼が既にそれをやり初めてさへ居るならば――彼の本然の、全精神的また具體的要求を、缺くるところなく滿足せしめ得る。衣食を得、自分及び自分の家族の面倒を見ると云ふことは彼の生理的要求を滿足せしむるであらう。同じことを他人にする時には精神的要求を滿足せしむるであらう。

十二月廿六日　最始の義務

人間の他の活動の一切は、これ等が先づ充たされた時に於いてのみ合理的である。如何なる部面に彼の使命が存して居ると考へようとも、即ち、人民を治めようとも、國民の保護に任じようとも、神聖なる職業に仕へようとも、教育に從事しようとも、人生の快樂を增加するの手段を發明しようとも、宇宙の法則を發見しようとも合理的な人間の最初にして最も確實なる義務は、常に彼自身の生命及び他人の生命を保存するために、自然との鬪爭に參加することの中に在る。

十二月廿七日　他人の破壞は不能

此の義務は第一に置かねばならぬ。何となれば人間にとつて最も必要なことは生命であるからである。そしてそれ故に人々を保護し人々を敎えんがために、又は彼等の生活を更に快適ならしめんがために彼のしなければならぬ第一の事は此の生命を保つ

ことである。然るに彼は此の闘爭に參加しない。そして他人の勞力を呑みつくして居る。そしてかくすることによつて他人の生命を破壞しつゝある。而も彼等の生命を破壞して居ながら、人々に仕へやうとすることは愚かしい、そして不可能なことである。

十二月廿八日　田園への歸還

此の實際的結論に達した時に、私は以前はかくも困難で複雜であるかの如くに見えたところの、それ等の問題の解決の如何に平易で簡單であるかに感動された。……即ち、等一に汝自身に必要なことをなせ、汝自身でなし能ふ凡てのことを自ら整へよ。——汝の茶壺、暖爐、水、衣服、

「これは一體、これ等のことを自分のためになさしめられて居たこれ等の人々に不思議に思はれはしないだらうか」と云ふ問に對しては、それが不思議に見えたのはほんの一週間ばかりの事であつて、一週間の後に於いては前の境遇に還ることが更に不思

議に見える樣になつた。

「此の根底の上に立つた一つの社會を、或る村に建設せんがために生理的勞働の團體を組織する要がないか」と云ふ問に答へて、これをなすためにその樣なことが最も必要だと云ふ樣には見えなかつた。もし勞働が、ある人をして怠惰であることを得しめたり他人の勞力を利用することを——金を貯蓄する人々の場合に於けるが如く——目的としないで、單に必要を充たさんがためであるばかりならば、然らばかかる勞働は自然と人民をして都會を去つて、此の勞働の最も快適にして生産的なる田舍に行かしめるであらう。

十二月廿九日　杞憂

またそこには何等の協會を建設する必要もない。何となればある勞働者は他の勞働者と自然的に協同するであらうから。「此の勞働は私の時間を奪つてしまつて、私から、私がしかく好むで居るところの、そしてそれに慣れて居るところの、そして疑ひ

の雲に閉される時には必要だと思惟されるところの智かの智的活動の可能を奪つてしまひはしないか」と云ふ問に答へては、その答へは全く豫期しないところのものであつた。一切の過剰なる精神的活動から逃れたので、智的活動の精力は、肉體的運動の割合に從つて增加した

十二月卅日　生活の四分野

私は此の全事件を、自分で斯くの如くに描いて見た。一切の人の一日は、彼の食事によつて四つの部分、もしくは百姓によつて呼ばれて居る如くに四つの段階に區分される、第一、朝食前、第二朝食より午餐まで、第三午餐よりお八ツ時まで、第四お八ツ時から夜半まで。人間がその方に引きよせられる活動も亦四ツの種類に區分される。第一筋肉の活動、手や脚や肩や背の活動——汗をかく位の激しい勞働、第二指や手頸の活動、技巧的及手工的活動、第三智的及び想像的活動、第四他人との社交的活動。

十二月卅一日　理想の社會

私は一つの社會を知つて居る。そこでは、人民は彼等の生活を自分自身で儲けて行く。此の社會の成員のうちの一人は他のものよりは教育がある。彼等は彼に講演を請ふ。そこで彼は夜になつて彼等のために講演しなければならぬので、晝間準備をしなければならぬ。彼は彼が他人に有用でありそしてそれを善くなし得ると感ずるが故にそれを喜んでする。併し彼は此の專一なる智的勞働に疲れて來る。そしてそれ故に彼の健康が損はれ出す、そこでその社會の成員が彼を哀れみ出す。そして彼に、來つて彼等と共に野にて勞働せん事を乞ふ。

10490

昭和二十三年十月十日印刷
昭和二十三年十月十五日發行

トルストイ一日一想
定價 金百七十圓

譯著者 加藤一夫
發行人 藤原廣藏
印刷人 門多憲政
印刷所 合同印刷株式會社

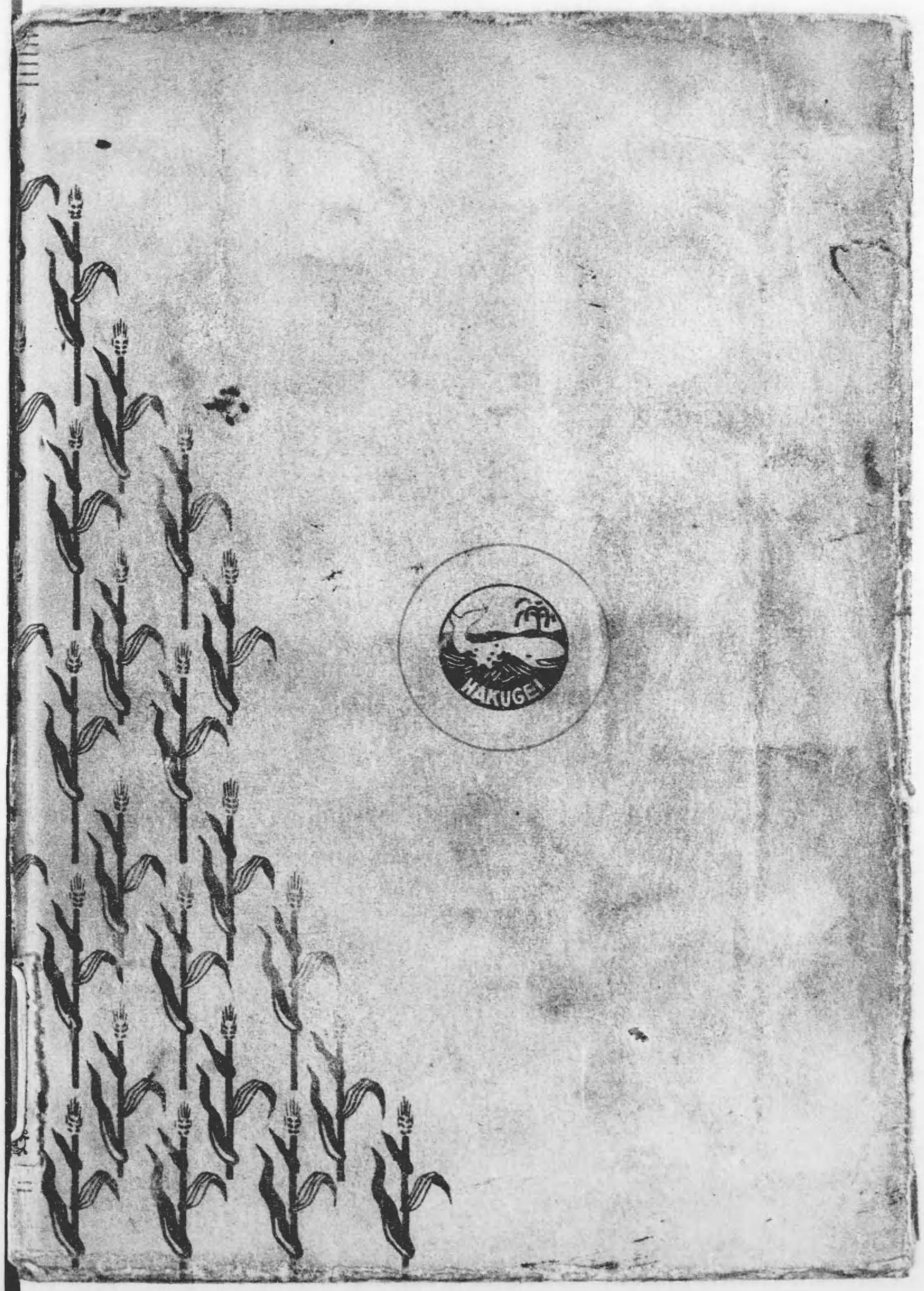
發行所 白鯨書房
（大阪）大阪市南區長堀橋筋一丁目三四
（東京）東京都千代田區內幸町二ノ三 幸ビル八九號

會員番號 A二〇八一一六

28. 12. 21

年　月　308

2

閲覧済

終